

センスオブワンダーは不滅なのだあ！の巻



新田児童館職員 半澤 夏実

子どもたちが人間として必要な感覚や能力を身につけるためには、遅くとも10歳くらいまでのあいだに自然の中で十分遊ぶことが望ましい。それは人工的な環境では育ちにくいものである。

畑や田んぼだった所には大型商業施設が建ち、草はらだった空き地がいつの間にかコンクリートの駐車場になっているような現状を、セツジツに残念に思う。

ではあるけれど、お手軽で便利な生活を得る代償として身近な自然を手放してしまった大人が、今更嘆いたり憂いたりしているだけでは何も変わらない。子どもたちはその環境下で成長することになるのだ。

社会が抱える課題の解決はなかなか簡単ではないとしても、今ある状況の中で子どもたちに関わりながら、学びや成長のプロセスに自分にできる役割を担う事はできるのだ。

幸い、まわりにわずかに残っている塀と塀の間の隙間に生えた草花や、庭や花壇などで日々見られるアリやミミズなどの小さな野生に関わる子どもたちの様子を見てみると、自然に対して抱く興味や関心は昔も今もそう変わっていないと感じられてうれしい。

ある日、下校途中の道沿いで見たことのない幼虫を見つけた小学1年生の女子たちが「くろいケムシいたから、きてえ！」と私を呼びにきた。手を引かれるままにそこに行ってみると、生垣の植え込みの下に生えたタチツボスミレの葉を食べていたのはマットな真っ黒い身体の背に派手なオレンジ色の筋が通り、身体の各節に分岐するトゲトゲした突起が並んだ3cmくらいのいかにも毒々しい見た目の幼虫である。これはタテハチョウ科のツマグロヒョウモンという蝶の幼虫で、無毒である。

「なんていうムシ？」って私の後ろから恐る恐る覗き込んでいる子どもたちに「ドクはないから、だいじょうぶ！」ってつまんだイモムシを手のひらにのせて見せると「かわいい！」って瞳をキラ

キラさせて愛おしそうに眺めている。そんな時、この人たちのこのひととき立ち会えたことをしみじみうれしく思うのだ。

子どもたちの心に芽生えた「？」には、安易な答えを渡してはならないと私は思っている。例えば小学1年生からの「なんていうムシ？」っていう質問に「〇〇〇〇っていうんだヨ！」なんて図鑑にあるような標準和名なんかを迂闊に口にしてしまうことで、覚醒し始めた脳への回路は遮断されてしまい、芽吹いた好奇心も探究する心も成長の機会も摘み取って、折角の学びのチャンスを逃してしまう場合も多いからである。

小さな子どもたちから手渡される問いには、言葉からだけでは判断しきれない沢山の「???」が含まれている。だから安直に“答える”ことは控えて、会話のやり取りの中から表情や反応などを深く観察し、どうするのが最良かを察知・判断しながら相手の意図に沿うように“応える”丁寧な作業が必要であると私は考える。それが、心を開いてくれる子どもたちへの礼儀であり、これからの時代を作っていく人たちに対する責任だと思うからである。

子どもたちが僅かに残された自然の中でたまたま見つけた小さな野生との出会いを、どうすれば学ぶ喜びや生きる力に繋げられるような良い出会いにさせてやれるだろうか？

虫たちが活発に動きまわる季節を迎えて、おじさんはそんなことをアレコレ考えながら、今日も子どもたちの珍問難問をかわしつつ“そそのかし”を密かに企てているのだあ！

